
self inflicted

劉龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

self inflicted

【Zコード】

N7578Y

【作者名】

劉龍

【あらすじ】

楽しい卒業パーティーになるはずだった。しかしそれは、一人の少女によって叶わぬものとなつた。少女は何を想い、何をするのか。周りの人間は何を考え、何をなすのか。様々の人間の思惑が絡まり、混じり、合わさるとき、一つの物語が紡がれる。その物語の末に待つのは、希望か絶望か、それとも

O オ シ ニ ニ ウ (禮書)

初めての小説と云ひ事で、至らぬといひばばかりだとおもいますが、
よひしへく願ひます。

Opening

辛かつた
苦しかつた
悔しかつた
憎かつた
怨めしかつた
厭わしかつた

人間として間違いなく自分より劣つてゐる下劣な彼らに、この私が
虐げられなければならなかつたという事実が。

何故、私が彼らに虐められなければならなかつたのか。

何故、私が彼らに辱しめられなければならなかつたのか。

何故、私が彼らに辱しめられなければならなかつたのか。

何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。
何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。
何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。
何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。
何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。
何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。
何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。
何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。
何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。何故、私が。

今までずっとその屈辱的な環境に堪えてきたけれど、もうそれも今

日で終わり。

刻は満ちた。

彼らに罰を下える刻が。

彼らに罪を贖わせる刻が。

彼らの全てを奪う刻が。

ずっとこの日を待っていた。

きっと君たちは泣いて、跪いて、地べたを這って、この私に赦しを
請うかもしれない。

そこまで態度を改めたら、流石に私の心も揺り動かされるだろうね。

だから何。

赦してもらえたとでも思っている。

ホント性根の腐ったクズだね。生きてる価値なんか無いんじゃない。
人類の汚点だよ。もう一つそ死んじやった方がいいのに。その方が、
色んな人のためだよ。

私の味わった苦痛は、屈辱は、クズな君たちから『えられたモノは、
そんな程度で赦せるモノなわけないじゃない。

君たちには、希望を魅せるだけ見せて、絶望の深淵まで墮とすの。

それが私の報復。

それが君たちの贖罪。

それが貴女への復讐。

OpenOffice(後書き)

感想・要望・誤字脱字の指摘・設定の不備 etc ありましたら、連絡お願いします。

Act · 1 side エリカ

「あつ、ヒリカ遅いよ。もう始まってるよ」

教室に行くと、茜が声をかけてきた。

「私は時間通りに来たよ。みんなが早く来すぎなんだって。まだ、7時だよ？ 一体いつから始めてたの？」

このクラスは勉強とか学生の本分みたいな正論めいた事以外になると積極的になる。

時にはそれは良いことなのかもしれないけれど、やはり問題のある行為でもあると思う。

特にこのクラスの積極性は行き過ぎな嫌いがある。

それも異常と言つていいほどに。

「うーん、私が来たのは6時頃だけど、その頃には、過半数が集まつて始めてたよ？」

「これだ。じついう暴走が始まつたらみんなそれに乘じて暴走し、それを担任はセーブしようとしたしない。」

いや、出来ない。

「終わるの、12時頃だけど体力持つのかなあ。帰りはみんな歩かなきやいけないのに」

いつまでも、みんなはどうせ終止ハイテンションでいるに決まっている。

そして、学校に泊まつていく、とか言い出すんだ。

明らかに卒業パーティーと言つては逸脱した行為。

それでも担任はきっと彼らのこの行き過ぎた行為を止めることはない。

だって、担任は一年の時からずっと『強い』人間の傀儡だったから。

だから、あの事件は起きた。

だから、あの事件は無かつたことにされた。

彼らと同様に『強い』人間はあの事件を起こし、行い、愉しんだ。

私のように『弱い』人間は、彼らに怯え、従い、事件から目を背けた。

それは、決して贖うことの出来ない罪。

それは、罰せられることなく、無限に積み上がっていく。

バベルの塔は、神の領域へと踏み入れる為に積み上げられた。

ならば、私達の罪は何のために積み上げられ、どんな罰が与えられるのだろう。

反吐が出る。

今現在のこのクラスの人間の在り方に。

強者は弱者を虜げ、自分の奴隸のように扱つた。撲りたいから撲り、蹴りたいから蹴る。

そして、直接虜げられた弱者は強者に媚びへつらい、彼らの『力』を笠に着て自分より弱い者を虜げる。

弱者の最底辺にいるのは、気の弱い人間。

彼らはその現状を諦観したまま、動こうとはしなかった。

この状況を開拓しようとすれば、奴らに目をつけられ、制裁と称した一方的な暴力が行われた。

終わらない悪循環。

こんな肩しかいのないクラスだったから、薊は傷付かなければならなかつた。

何より、それを見ていることしか出来なかつた自分が、情けなくて悔しかつた。

結局、ついぞこのクラスの歪みを矯正することは出来なかつた。

でも、まだチャンスは残されてる。

今日、この日が最後のチャンス。

薊は動く。

愛する彼女の為に僕が出来ることは、クラスメイト肩どもの動向をチェックすることだけ。

誰にも彼女の催す宴を邪魔させない。

もつ、誰にも彼女を傷付けさせない。

宴の供物ヤエブトは揃つた。

耳に付けたインカムから声が聴こえた。

「皆さん、準備は終わつたかな？」

電話してみると告げ、教室を離れ、所定の位置についた。

「アイン、クリア。いつでも」

俺が応えると、仲間も各自で応えていく。

「ヌル、現在、職員室の封鎖中。…………完了した」

「フュンフ、校内に存在する電話、全無効果完了」

「ツヴァイ、教室にてスタンバイ。カメラの状態、確認求む」

「ドライブから、ツヴァイへカメラの角度、上方10°、左方に20°調整求む。………オーケー」

「フィーラ、電波妨害準備完了」

「さあ、『制裁』への『断罪』を始めよ」

宴が、始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7578y/>

self inflicted

2011年11月24日16時45分発行